

第1回第3次岡崎市文化振興推進計画策定委員会会議録

1 日時

令和8年8月 26 日(水) 午後2時6分 開会 午後3時 52 分 閉会

2 場所

岡崎市役所 東庁舎5階 502 号室

3 委員(敬称略)

出席者 柏木典子、黒澤拓朗、菅沼翔也、林羊歯代、山田悠莉、渡辺傳次郎

欠席者 なし

4 事務局

社会文化部 専門監 手嶋俊明

文化振興課 課長 田中典子、副課長 梅澤秀一、係長 新家孝義

主事 大原靖代、主事 加藤愛梨

5 傍聴人

なし

6 議題

第3次岡崎市文化振興推進計画(案)について(協議)

7 議題要旨

議題(1) 第3次岡崎市文化振興推進計画(案)について(協議)

委員長 それでは、議題(1)第3次岡崎市文化振興推進計画(案)について、事務局から説明をお願いします。

事務局 (事務局説明)

委員長 (一人ずつの発言を提案)

委員一同 (賛成)

- A 委員 2013 年のあいちトリエンナーレは、本当に画期的な企画だった。古いものの中に、新しいものを見つけていくような作業ができたが、ああいう画期的なものがこの10年何もなかった。名古屋など遠くからも足を運んでいただき、岡崎の会場でいろいろな体験をしていただけた。岡崎市内でも活気がなくなってしまうていた商店街、特に元能見の一角が、トリエンナーレで画期的なまちおこしがなされた。今でもそのあたりの路地が商店として楽しめ、山車などにもぎわってお客様が足を運ぶ場所となっている。今でいうと東海オンエアの聖地巡りを目当てで若者が岡崎に足を運んでくださっているような旋風であった。トリエンナーレは県の補助があったのか。
- 事務局 トリエンナーレは、県と市の事業で、県も市も費用は出している。
- A 委員 市の予算だけではなかなかできない。スポンサーなどを見つけないと大きな事業は難しい。シビックセンターも改装されたし、ある意味画期的な活動がまた新たに始まるのではないかと思っている。
市民のなかに溶け込んでいく活動というか、いろんな人たちに自分たちの活動を知ってもらうような部分が発信できるのは楽しいだろうと思う。とにかく裾野を広げたい、普段その芸術に触れていない人たちが触れられる機会が大事だと思っている。
岡崎文化協会では、垣根を超えた活動が行われている。同じ会場でいろいろなジャンルの活動を観たり体験することで嗜みの世界が広がったり、興味を持てなかった分野に興味を持てたりする機会が作られている。
- B 委員 額田の山のほうは若い人たちはあまり行かない地域だと思うし、地名を知らない人も多いと思う。そういうところで自分たちが発信することによって、若い人たちが足を運ぶようになってほしいという思いがあり、今後もそのような地域を題材にした作品を作りたいと思っている。過去に制作した作品では、作品のために作ってもらった盆踊りが実際に地元のお祭りで披露されたこともあった。
今度は、額田のある地域を題材に、地域で継承が難しくなっている文化・歌・踊りを若者が繋いでいくという作品を作りたい。
- C 委員 この計画自体は内容としても素晴らしいし、これが実現したらいいと心

から思ったが、この具体的な数値を達成する中身・計画をいかに実行に移していくか、というのが大事なのではないかなと思っている。

1つ気になったのが、今年度までの計画の数値的なところは出たが、実際の中身のところでどれくらい実行に移されてきたのか。そこが一步見えてくると、向こう5年どのように動いていくか、というところがより具体的になってくると思う。

もう1つは、計画の中の「岡崎市内に向けた」という、「外じゃなくてまず内を」という考え方が岡崎らしくていいなと思う。私は大学で市外に出て、岡崎の人たちは岡崎に誇りをもっていて、岡崎が好きだということがよく分かった。だからこそ、岡崎の人が気づいていないところをいかに伝えていくのか、知ってもらうことが非常に大事だと思う。自分自身、「岡崎文化協会」の存在もここ数年で、岡崎で活動するようになって知った。岡崎がこんなに文化芸術が豊かなんだ、ということを今さらながら知った。私のような人間は山のようにいると思うので、まずは今実在しているものをどのように伝えていくか、ソフト面をどう実行していくか、というところがとても大事だと思う。

また、23ページの伝統芸能の資料収集と保存継承のところで、ぜひ、どれだけ岡崎に伝統芸能があるか、今は絶えてしまったがかつてあったものも含めて資料を収集してもらって、それを魅力的に編集して、岡崎市内外に「発信」というところをぜひ加えてほしいと思っている。今はどんどんグローバリズムでいろんな垣根がなくなっていくが、そんな時代こそ、ローカリズムが大事になってくるだろうと思っている。特に岡崎の人は地元愛が強く、昔から残るものも多いので、今こそローカルを盛り上げる、というスタンスでやっていくことで、岡崎の文化芸術の魅力をより発信できるのではないかと考えている。

市内の石切り場で音楽イベントが開催されていたが、行政が見落とししていたところをうまくキャッチアップしていける民間の事業者・若者がいる。行政がいかに結び付けるか、規模を大きくしていくかがこれから大事になっていくと考えている。

D 委員

今教育現場は非常に忙しく、時間がないなかで過ごしていて、子どもたちも教員も余裕がない状況が起きている。そのような状況で本当に必要なものから選んでいくとなると、文化とか芸術に触れる機会は命に関わるものではないのでカット、というような話を聞くことがある。でもそれは問題だと思っている。また、燃料が高騰や物価の上昇で、これまでバスを出しているような課外活動ができていたのが、台数を減らし

たり、本来なら複数回に分けて行く課外活動をお金がないので1回で行ったり、という事例もあり、子どもたちが本来期待する学びや体験ができないのは深刻な問題だと思っている。そうなってくると、やはりこちら側から学校に行って、子どもたちに出前講座とか出張ということで、経費をかけずに子どもたちが本物に触れる機会を増やしていったらいいのではないかと思う。

中学校の部活動が昨年から大きく変わり、学校ごとではなく地区ごとになって、種目が限られ、活動が縮小している。例えば演劇だとか、音楽に関係する合唱、吹奏楽とか、将来の文化芸術との関わりへと続く経験がどんどん減っていくと、地域の文化振興に繋がることが減っていくことが想定される。市や地域で子どもの文化活動を守っていかなくてはいけない時期に今来ているのではないかと、危機感を持っている。

また、岡崎の文化が県内では存在感がないのかと思った出来事が最近あった。岡崎の存在感を出していくにはこれからどうしたらよいのかと感じた。

E 委員

岡崎五万石など、岡崎の唄を継承する若い世代がほとんどいない状況である。市民歌舞伎の話も出たが、踊りや役者さんは募集してできるが、地方、三味線や長唄といったところは時間がかかるのでなかなか難しく、それはなんとか養成していかないと、と思った。

それをどこでやるのかなと考えたらやっぱり学校かなと。子どもの力ってすごいので。伝統芸能は幼いころから始めないと遅いことが多い。子どもたちが小さいうちからそういう活動にふれる機会ができればと思う。小学校だと、矢作小学校の雅楽や大樹寺小学校の和太鼓、男川小学校の落語部など、その地域の学校に、伝統芸能に触れる場所があることで継承されていくと思う。なんとかしてそういう動きができないかと思っている。

自分は第1次の文化振興推進計画の時から携わらせていただいているので、今回の計画を拝見すると、実際なかなか難しいよな、というところも頭には浮かんでしまう。

リバーフロントとか QURUWA のところでいつも演奏やワークショップなどがやっている形にできればいいなと思っている。ロンドンに行った時に、地下鉄や道端など、街のいたるところで演奏や大道芸がやっていた。聞くと、みんなプロで、それで生活しているとのことだった。誰でも披露していいのではなく、ロンドンの市長がOKを出さなければやら

せてもらえないそう。その例は極端かもしれないが、岡崎でも、音の問題とかはいろいろと出てくるとは思うが、あそこの一角だけでも、土日だけでも、多くの人の目に触れられる場所で文化芸術活動が常に展開されているといいなと思う。

ワークショップというところで、文化協会の体験学習指導者派遣事業で学校講師を派遣する事業があるが、体験して終わりにになってしまうので、その先の受け皿が欲しい。こういうところへ行ったら活動ができる、というところを周知していきたい。

B 委員

岡崎には市民会館、シビックセンター、せきれいホール、など文化芸術の活動をする場所があるが、自分はほとんど行く機会がなかった。機会があって市民会館には行くようになったが、自分と関係ないものとなると全く行かない人が多いと思うし、知らないことも多いと思う。ここにいらっしゃる委員のみなさんのように文化芸術活動をされているかたは岡崎にたくさんいらっしゃると思うが、それを知らない人が多い。もしかしたら隣の家の人がそういう人かもしれないけど知らないということもあると思う。今市民歌舞伎も1年くらい稽古をして、SNSなどで告知もしているが、それでも、近所の人でも知らないという人もいる。市民がもっと身近に、分かりやすく文化に触れられる機会がやっぱり大事だと思う。発信はもちろんしていると思うが、届いてないのではないかという印象がある。

気軽に市民が芸術をやっている、出品していいような場があるといいなど。それくらいのラフさで、ハードルを下げたいなという思い。子どものうちから文化芸術に触れる機会があれば、そこがきっかけで将来の選択肢に文化芸術の道が入って来る子もいると思う。

岡崎市にはこんな活動を頑張っている人がいるということを市から紹介して市民の皆さんにふれてもらう機会が増えれば、その人自身、岡崎市からの応援になり、市民が知るきっかけにもなる。

岡崎市の誰がどんなことをやっているかっていうことを、もう少し気軽に出していってもよいと思う。

F 委員

事前説明を聞いた時にいくつかそこで出た疑問点を確認させていただきたい。

大事な数字目標、例えば 15 ページに『指標の設定』があるが、まず目標値がどのように設定されたのかというところ、今日事務局説明で「目標達成できたものは5%上乗せ、達成できなかったものは据え置

き」とあったが、自治体の政策においては、「5%」という数字はよくある数字(基準)なのか。達成できたらどんどん上がっていくものなのか。どのようにその「5%」という数字を出しているのかが気になった。

事務局 「5%」というのも、「20%から5%」は頑張ればできると思うが、「90%から 95%」はなかなか難しい、というように、一概に基準の数値であるというものではない。自治体の定例的な数字であるということでもない。

F 委員 そのあたりの根拠はなんだろう、と思った。数値として達成できていなかったところも、達成はできていないけどそもそも数値が妥当だったのか、というところの検証がどこに書いてあるんだろう、ということが資料からは見えなかった。

6ページの計画全体に係る成果指標「岡崎市が文化的なまちだと思うか」が 63.9%。「文化芸術に触れることが大切である」が 79.6%、「過去1年に文化芸術活動を行っている市民の割合」が 33.7%、これをどのように岡崎市が捉えたのか、というところで、それは全国平均とか、例えば岡崎市と同じような規模の他の自治体と比較したのか。例えば名古屋市は 57.6%で、それと比較すると岡崎市の数値は高いのに、6ページの報告を見ると「目標値に達していなかった、十分ではない」という課題の書き方がされているので、それは本当に正確なのかという疑問が生じた。

市民意識調査にはどういう方式で取られたアンケートか。

事務局 2回に分けての電子申請と、無作為に抽出した市民のかたへの郵送によるアンケートの2種類。

F 委員 無作為抽出のアンケートは 3000 人が対象で回答が 1000 人くらいと聞いて、無作為かつ 1000 人も集まっているのでかなり岡崎市民の文化意識が反映されていると思うが、対して電子申請、インターネットでの回答は、自分でそういった情報に関心を持っていて、回答をしよう、というもともと文化意識が高い人たちのものだと思う。その2つの回答を並列していいのかと思った。

最後の参考資料3の部分の具体的な個別施策は、こういうものをどのように検証するのか、どのように実行していくのかというところが、推進していく主体がどこなのか、どういう組織になっているのか、その検証・評価方法が資料に載っていないのか、というところは疑問だ

った。第6章くらいに追加してもいいのではと思った。

C 委員 個別施策のところは非常に大事だと思っていて、でもこれを全部実行するのは相当労力、人員、予算がかかってくるのではと思う。なのでこれを全部走らすのか、この中から優先順位をつけて1つ1つのスケジュールを立てていくのか、計画の段階で具体的に落とし込んでいく作業も必要なのではないかと思う。

F 委員 推進体制と、どういう形で市が取り組んでいくのかということ、どう評価するのか、市民意識調査の項目でミッション・ビジョン・バリューが実行できたのかどうかということを計る問いに変えられるのであれば、そこを精査して市民に問うことを1年だったり5年だったり、どこかの中間で行うかということを計画として盛り込むと全体としてはかなり説得力を持つものになるのではないかと思う。課題の結びのあたりに載せると説得力があるのでは。

後半の個別施策のところ、子どもや小中学生に対しての施策は手厚いが、学生～30代くらいの若者に対してのものが少ないなと感じた。メディアアート系も、なかなか中間層には届かないので、もう少し触れてもいいのかなと思う。

計画の体制についての概要が1つの章としてあったらよいと思う。個別具体施策の表の見方なども分かりやすく書かれているとよいと思った。

A 委員 今日部活動の地域化、ブロック化の話が出たが、いろいろと課題があるという声が聞こえてくる。子どもの心をいかにやる気にさせて、いい結果にできるかを模索しているところだと思う。そういう子どもたちのことも、大人が理解していてこそできることなので、いろんなところで大人・地域が手厚くサポートしていくことができればと思う。

事務局 推進体制に関するご提案の中間見直しについて、前回の計画は10年計画であったが、今回は変化の激しい社会状況・財政状況を考慮し、5年間のものになっている。そのため5年後には必ず見直し・評価の機会がある。

F 委員 成果の評価について疑問が残らない形になればよい。

(議案協議終了)

事務局

(事務局説明)

- ・今後のスケジュールについて
- ・情報の共有について

午後3時 52 分 閉会